

アセファル - 無頭集成体：頭脳求心より遠心へ

北 京一（ん倶楽部 / 社会構想研究室）

KITA Kyoichi (N club / Social Kohsou Laboratory)

総合学藝誌というかなり大見得を切った『構想』誌の再起動 11 巻の冒頭記事を執らしていただくにあたり、もうすでにこの記述において頭となった「頭」に関連して思うところを開陳し、急いでこの日本構想学会の組織編成の特徴のひとつになっているアセファル（Acéphale）についてその意図するところをあきらかにしておこう。

「急ぐ」必要はまずもって誤解を回避するためである。アセファルといえば G・バタイユが事実上創刊した機関誌と秘密結社の名称を思い浮べる人も少なくないだろう。日本構想学会が組織づくりに用いているそれもその引用というか、その歴史性までは引こうとしない表面的なことばの借用である。というのも日本構想学会が秘密結社であるとか、それを志向しているということはまったくないし、ましてやバタイユのそれは宗教的ないし神秘的秘儀の実践の場であったと伝えられているが、日本構想学会にはそうした関心はまるでなく、ゆえにそうした場とは無縁だからである。

ということであれば、そもそもそうした連想を容易に惹起しかねないことばや概念を使うこと自体の軽率さは非難にあたるであろうし、それならばその批判は甘受する。だが、それでもあえてアセファルをこの学会の組織形成原理として掲げ、用いるのはその「無頭」ということば自体の指示内容がもつ意義と価値に、この学会の運営体制と原理をおいたため、他ならぬこのことばを用いることが最適であったためである。

さらにまた無頭のシンボルは、この日本においてはバタイユのフランスよりもむしろ国民にとって馴染み深いものとして半世紀にわたり親しまれつづけてきているという背景も手伝った。否、それは親しみというより、ある種の崇敬の念に近いといってよいものかもしれない。そのシンボルとは岡本太郎作の『太陽の塔』である。日本構想学会のウェブサイトの「組織と運営」のページの右側には、かの塔があまり見かけない横アングルから撮したシーンが薄っすらと掲載されている。ただそれからあの有名な黄金仮面が外してある。太陽の塔には 3 つの顔があるということはよく知られているが、頭部の金色に輝く顔はその装着ぶりからもあきらかなように、身体から意図的に切り離された仮面としてある。ただわたしたちは普段見慣れた人間や人形の形象に則して太陽の塔を臨むから、その黄金仮面を頭部の顔として知覚し、またその認知に不協和をおこすことなくこの塔をそれなりの落ち着きをもって受容し、さらに親しみさえ感じとっている。だが、実のところ太陽の塔はアセファル像、まさに A・マッソンが機関誌『アセファル』の表紙に描いたとされる首斬り像そのものになっている。しかもその斬り取られ方の造形はまさに頸部を一刀両断したかたちになっている。太陽の塔はあの人目を引く黄金仮面がなければ、なんともグロテスクなかたちが屹立して

いる姿なのである。

作者太郎はフランス留学中、バタイユとも親交をもち、実際アセファルの会にも足を踏み入れたことを本人が語り残している。そのころの経験がこの作品制作に投影されていることは、調べた限りでは言及が見当たらないもののあきらかである。現在はたくさんの桜の木が植えられた大きな公園にそびえ立つ塔だが、70年万博の際にはこれが当時の建築界の頭ともいえた丹下健三作の大屋根に大穴を穿って建立された。これほど痛快な出来事はなかったのだが、1970年万博がこのほどの2025年万博とは比較にならないほどに、まさにべらぼうな祭りであったことは、こうした無茶ぶりが人類の進歩と調和をテーゼに掲げたなかで成立したという事実には照らせば実にあきらかである。しかも当たり前を考えれば万博総合プロデューサーであった丹下の怒り心頭というところだが、太郎を万博のテーマプロデューサーに起用したそもそもの張本人が当の丹下であったという。半世紀前の日本はこうしたいきさつをみてもこんにちよりずっと精神的に大きかったといえそうである。そして岡本太郎のしたたかさをまさに学藝という領野から讃えねばならないのだが、その讃美は実はこの国のひとたちがこころの奥底では受け止めてきたところともうかがえる。というのは、その万博で建造されたパビリオンも大屋根も予定どおり祭りの後はすぐに解体され、いまはもう跡形もなく消え去った。跡地に残されたのはわずかな記念物と太陽の塔、そして万博の正式シンボルとされ太陽の塔によりも背が高かったエキスポタワーであった。このタワーは当時の日本建築界のエースのひとりであった菊竹清訓による話題のメタボリズム建築でもあったが、世紀をまたぐなかで解体された。だが、太陽の塔だけは改修を経て半世紀を越えた現在もこのほどの25年万博を横目で見ながら立ち続けている。この事実は容易には壊せないなにかをわたしたちがそこに感じとってきたからなのだろう。そのなにかはこの造形の背後でかたちなきかたちとしてはたらいてきたことがらであり、それが感じ取れてしまうがゆえにさすがに解体好きの日本人にも躊躇されるところであったと思わざるを得ない。このかたちなきかたちはおそらく構想力の真髄のひとつともいえるのだが、それについては深入りせざるを得なくなるから稿を改めることにする。

ところで、もともと無頭、アセファルは20世紀初頭の大戦期欧州にあつて典型的にはヒトラー/ムッソリーニのようなファシズム独裁へのカウンターアタックを衝撃的に象徴する概念/形象としてメッセージされた。それに対して日本構想学会の組織原理としてのアセファルがもつ意味をあきらかにしておく。

わたしたちの組織に対する常識感は責任者とか代表として長なり頭をおくことを当為とする。現実には組織化された集団にはそれがあることを前提とし、法務局に法人登記するにもそれなしには申請できない。集団だけでなく一個人にしても頭がこの意識を制御し身体感覚・運動をはじめとする心身の中核として機能していることが事実としてある。だから頭を断ち切ったアセファル像は無頭すなわち無脳＝無能のグロテスクでしかないし、当然ただちに死や物質としての器官利用をイメージさせるものとなる。

だが、この常識感は頭脳求心主義という自民族中心主義と重ね描きされた偏頗で退屈な判断規範による感覚/認識にもとづき抱かれている。頭脳求心主義は人の心身理解、とりわけこころのこと

がらについてはなんでも頭脳にその解を求め、まさに AI 解のごとくインスタントに了解してしまう思考の志向であり嗜好ともいえる。これがエスノセントリズムと相同であるというのは、この観点が他ならぬそうした頭脳発の認識のもとにあることによる。

頭脳求心主義にもとづく了解の典型をみてみよう。わたしたちがお腹がすいてしかたがなくなるのはどうしてでしょう。それは脳の外側視床下部の神経が血糖値の低下などを検知して活動を高めることによるのです。むろんそのことはこの半世紀をつうじて多様な実験にもとづき検証済みのことです。ほう、なるほど、といった類である。でもこれはほんとうに、なるほど、なのだろうか。認知の、運動の、つまり知ること、なすことのすべての原因を頭脳に求め、説明し、それで説明し得たとしてしまう。この了解規範が習慣化する（パターンが身につく）と、頭脳を心身の司令塔としてみなすようになる。そしてその司令いかに心身の活動は決定されていると単純化するようになる。脳の活動画像で細胞の活性部位が見えれば「ああ、あなたが今それを感じているのは脳のこの部分ですよ」という。でもこれは、だからどうした、ということにすぎない。それは当然、神経伝達でつながった先方の脳のどこかで盛んに神経細胞が活動しているのでしょうか、だからといってそれはこの感じ、この空腹感の説明にはなっていない。「どうしておなかが減るのかな」という歌詞の問いへの答えになっていない。それは脳のここの神経が活動するからです、といわれても、その活動がどうしておなかが減る気持ちになるのかという謎に対する説明になっていない。だから昔はこういう細胞のことをおばあちゃんを見ると活動する神経細胞群をおばあちゃん細胞と名づけたことと同様、空腹細胞などと呼び、この彼らが活動し「お腹がすいた」と叫ぶからそういう気持ちになるのだ、などと説明したりもするのだが、これはすでに冗談の域、つまり笑ってごまかすところに入り込んでいる。質問への解はその空腹細胞自身に押し付けられただけで細胞自身の活動がどうしてお腹がすいたという気持ちを引き起こすのかの説明は語られずに残されたままになっている。

頭脳の科学を任ずる神経科学における説明はこうした言い逃れの宝庫である。神経伝達物質 X が大量にシナプスに放出されるからです、といわれようと Y タンパク質が Z に受容されるからだということがわかって、たださらなる要素に還元しているだけでそれがどうしてこのお腹が減るという気持ちになるのか、という元々の答えにはならない。でもわかった気になる。そこにはその気になるのがまた頭だから、ということが多分に手伝っている。たとえ、はっと気づいても、わがことゆえそれ以上はやめておこうという忖度があるのかもしれない。典型的な中枢神経民族に閉じたエスノセントリズムの支配ぶりがみえる。

閉世界でのわかりやすさとそれゆえの一時的な気持ちよさは当然の如くそれを他のことがらへの類推、転用へと誘う。そこででの適用が功をなせば、その思考規範はさらに強化される。転用の典型はわが周囲と同胞たちとの関係に向けて、すなわち個人を超えてその個人たちが集まった集団になされ、組織原理に向けられる。むろん組織の体制化自体はイデオロギー形成以前に自然形成的になされている。これはヒトを含めた社会性動物一般に認められることであり、集団のなかでの先後含めた天性による力関係が女王やボスたる頭を決め、その支配 - 服従関係の統制のもとに体制化がな

されている。ミツバチもアリもサル山もしかりというわけである。

頭脳求心主義の観点では組織の中核は頭、首長にあり、ということを疑わない。だから体制はトップ次第という強い信仰ができる。この信仰の強靱さはごくわずかなマイノリティとしての頭部を支える信仰体系の母体、その手足胴体が量における圧倒的マジョリティの信徒としてあるという著しく非対称の構造を根城に成立している。

このマジョリティはとりわけわが国の集団にあってはもうひとつ強固な「民意識」が支えている。そのためこの集団がもつ頭脳求心主義のイデオロギーは揺るぎなき精神基盤、というより岩盤と化して成り立っている。この国の民主主義はデモクラシーと一線を画した特殊民主主義になっている。この特殊性をみることはたいへん興味深いところだが、それだけにここでの論旨からはずれてしまうのでこれも稿をあらためて述べることにする。

頭脳求心に信仰化した思考規範はリーダーシップ論への嗜好性、偏向性にも如実にあらわれている。組織におけるリーダーのあり方、リーダーシップが組織挙動のイロハを決定するといった見方はほとんど洗脳的に人々に刷り込まれている。このように書けばおそらくたちまち反発を買うであろう。それはそれほどにこの信仰の強さ、毒性の浸潤度合いの深刻さが露呈するところだが、それはまたこうした物言いが直接的な頭脳攻撃であることによる頭脳からの当然の防御反応だからである。そのこともあってリーダーに関する強弁はすべての人にとって心身における自己陶醉を大なり小なりもたらすことになる。同時にそれはその大多数の「場合の数」において自分が反応可能であること（つまり責任）からの回避を約束してくれる心地よい語りになる。その快感は実に身体をして頭脳に至らしめる快なのである。だからこれは本来、「おい！頭脳よ、目を覚ませ。その術策にまんまと乗るな！」というべきところである。

だが、頭脳はなかなかこの声を素直に受けとめない。だから、組織を動かすにはもはやこれしかないのである。それが頭を断ち、否、ここは太郎がおそらくかれの美的趣味にはあわずに離れたのであろうバタイユから、ただ肝となる示唆だけを摂取し、かれ特有のお茶目ぶりをしてその造形に表し、現したように、頭をその身に腹蔵したアセファル、無頭の集成体としてその全身にわたり「直接反応」と自律協働を呼びかけた構想になるのである。なによりもそれはいつもほとんど情けなきトップ・マイノリティにとっての下行性の心身のことではなく、いつもほとんどのわたしたち自身であるマジョリティの心身そのもののことなのだから。頭脳求心より遠心へ。

2025 年 4 月 15 日 受稿